愛しのセブン -My dearly beloved seven-

ぷるしあんぶるぅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛しのセブン‐Ｍｙ ｄｅａｒｌｙ ｂｅｌｏｖｅｄ ｓｅｖｅｎ‐

【Ｎコード】
Ｎ０８３０Ｇ

【作者名】
ぷるしあんぶるぅ

【あらすじ】
愛する家族を失った少年は、姉の形見、初代『サバンナＲＸ‐７』を、七年間大切に整備し続けて来た。やがて青年となり運転免許を取得した彼が、いよいよその車をドライブすると言う日、突如ＲＸ‐７が消え去り、替わりにそこに居たのは、ボディコン女『ナナ』だった。ハードでファンタジーでちょっぴりエッチな走り屋系物語、ここに開幕？

第一話　姉の面影（前書き）

【ファンタジーです】

この物語は、ファンタジーです。登場する人物や組織は、その名称に実在の商号・商標等を用いる場合（主に下記に確認されたマツダ株式会社様のもの）も含み、全て架空のものです。

【商標等について】

作中に登場するマツダ株式会社様の商標等は、以下の点に留意して使用されています。

●誹謗、中傷等、マツダ製品のイメージダウンに繋がる使い方は行わない。

●本サイトとマツダ株式会社様とに特別な関係（資本提携、業務提携等）があるように誤解を与えるような記載及び使い方は行わない。

●作中に、マツダ株式会社様の製品名称等を使用させて頂く事に対し、マツダ株式会社様が特段異議を唱える事はない。

●本作品の出版による収入等、何らかの利益を得るものであっても、マツダ株式会社様の利益を害するものでない限り、マツダ株式会社様が異議を唱える事はない。

以上のことを確認させて頂いた上で、本作品の執筆活動は行われております。本サイトは、マツダ株式会社様の承認を得たものではないことをご理解下さい。

『マツダ株式会社お客様相談室』様の懇切丁寧かつ寛大なご対応に、心からお礼申し上げます。

【お願い】

更新はかなりのスローペースになると思いますが、気長に読んで下さる方は、是非応援の評価コメント下さい（笑）。

第一話　姉の面影

「やっと……この日が来たよ――――姉さん」
薄暗く狭いガレージ。上げかけのシャッターに片手を添えたまま、悠人（ゆうと）は立ち尽くしていた。見詰める先には、白いスポーツカーが一台きり、ひっそりと置かれている。
どこか古めかしく、それでいて低く構えた流線形が新鮮にも感じられるそれは、真夏の夕陽を浴びて、手入れの行き届いたボディを紅く輝かせていた。
「おぅ、ゆうちゃん。やっとこ、そいつに乗れんだなぁ。今まで、良く頑張ったな」
作業着姿の中年男性が、背後から話しかけた。このガレージを含む小さな自動車屋、カジモータースの主人、梶源一郎（かじげんいちろう）だ。
「あ、おじさん――本当に有難う御座います。この七年、ずっと僕とこいつの面倒を見てくれて……」
悠人は、軽い背伸びでシャッターを上げきって、源一郎の方へ向き直ると、深々と頭を下げた。
「水臭せえこと言うもんじゃない。ウチには子供がいないからな、俺もカミさんも嬉しかったんだ。それに、良く働いてくれたしなっ」
悠人が両親を亡くしたのは、小学校に上がったばかりの頃だった。あまり裕福でない家庭ではあったが、両親は朗らかで、十二程年上の優しい姉もおり、それなりに幸せだった。
姉は、家の生活と、自分の趣味――或いは夢と言えるもの――の為に、高校を出てすぐに働き始めた。そして、自分の為に遣いたかっただろうに、初任給からの二ヶ月分で、「新婚旅行」と称して両親に海外旅行をプレゼントした。結婚式も披露宴も挙げていなかった両親がとても嬉しそうな顔をしていた様子が、今でも鮮明に思い出される。
だが、それは悲劇へのチケットであったと言えるかも知れない。

両親の出かけた南の島が、その地域では稀な大地震に見舞われた。津波で多くの死者が出て、世界的なニュースになった。そして、テレビのアナウンサーが読み上げる邦人の死亡者の中に、両親の名前も有った。

それからと言うもの、姉は昼の仕事と時折の夜のアルバイトで生計を立てて悠人を養い、悠人もまた、幼いながら家事の一切をこなし、姉を助けた。姉は、一緒に過ごす時間が少ないなりにも優しく接してくれ、返って、その「両親の分まで愛情を注がなければ」と無理をしている様子が、悠人の胸には痛かった。自分が旅行をプレゼントしたせいで両親が亡くなったと、自分を責めている節が有ったからだ。

だが、それすらも長くは続かなかった。姉も悠人が十一歳の時、交通事故で亡くなったのだ。以来、姉と親交の有った梶夫妻が、悠人を引き取り育てた。

「ううん、本当は、おじさんとおばさんにもっと恩返しがしたかったんだけれど……この車だって、僕が乗れる様になるまで整備して貰ったし。これからも、頑張って工場（こうば）手伝うね」

感謝の気持ちを伝えたくて、精一杯の笑顔を見せた。

「まったく……他人行儀な言い方するなぁ。ゆうちゃんらしいと言えば、らしいけれどな。……まっ、その、なんだ、ウチはゆうちゃんが居てくれて楽しかったしな、そのＳＡだって、ゆうちゃんにとっちゃ怜奈（れな）の形見みたいな物だからな、放っておく事は出来なかった。それだけの話だ。大体、俺はパーツを用意してやっただけで、手入れはゆうちゃんが全部自分でして来たじゃねえか」

昭和五十五年式のサバンナＲＸ-７。まだ東洋工業の社名だった頃のマツダが製造した、ロータリーエンジンと言う特殊なエンジンを搭載した車種だ。車に詳しい者は、そのＳＡ２２Ｃ型という型式からＳＡと呼ぶ事が多い。

この車の所有が姉、怜奈、唯一の贅沢だった。源一郎の話では、姉は、エンジンが壊れ廃車待ちであったこの車体を、高校一年生の

時にアルバイトをした収入で安く買ったのだと言う。それを、源一郎の助けを借りながら、高校在学の内に直してしまったらしい。
「兎に角、浮かれて事故ったりするなよ。知っての通り、ただでさえテールハッピーなＳＡなのに、こいつは怜奈の意向で１３Ｂにターボのまま換装してある。ラフに踏めばすぐにケツがぶっ飛んでくから無茶は禁物だぞ」
　１３Ｂは、ＳＡ型よりも新しいＲＸ－７に搭載されたロータリーエンジンで、標準の１２Ａエンジンよりも高出力である。小型、軽量なＳＡ型ＲＸ－７にとっては、身に余る力で、走行時に制御し難い性質となる。まして、運転初心者の悠人には、尚更のじゃじゃ馬に感じられる筈だ。
「うん、気を付けるね……」
　源一郎に面倒をかけたくなかった悠人は、仮免許を手にした後も教習以外で公道に出る事はしなかった。今まさに、初めてこの車を運転しようとしている訳だ。
「……もっとも、事故で家族を失う苦しみなら、ゆうちゃんは良ぉく知っている筈だ。大丈夫だとは思うが……兎に角、気を付けて楽しんで来な」
　そう言うと、源一郎は工場へ戻って行った。
「……有り難う、おじさん」
　悠人は、向こうへ行く源一郎の背中へ、再び深々と頭を下げた。
　また、暫（しば）し一人でＲＸ－７と向き合う悠人。今は亡き姉、怜奈への思慕が胸を締め付けるが、同時に、彼女が愛したこの車のハンドルを、これからは自分が握って行くと言う事への希望がない交ぜになり、何とも複雑な心境だ。
「……よしっ」
　意を決して、車に歩み寄る。悠人にとって、この車のハンドルを握ると言うことは、怜奈の死と向き合うと言う事でもある。
　ガチャリと音を立てて、そっとドアを開ける。怜奈が気に入って付けていたコロンの淡く甘い香りが、七年経った今でも、残ってい

る様な気がしてならない。
「姉さん、いつもこうしてたっけ……」
助手席から見ていた怜奈の仕草を真似てみる。キーを差し込み、クラッチペダルを踏み込む。緩く握った左手の小指側でシフトノブをコンッコンッとノックして、ギアがニュートラルにある事を確認してから、キーを捻ってセルモーターを回した。そして、アクセルを小さく煽る。その後、機関の回転数が落ち着くと、――バッ、バッ、バッ――と、ロータリーエンジン独特のアイドリング音がリズムを刻み始めた。
「久しぶりにお前を連れ出してやるのが、姉さんじゃなくてゴメンな。でも、これからは僕が大切にするから……」
寂しげな笑みを浮かべ、もたれ掛かる様にしてハンドルに額を押し付ける。怜奈との思い出が頭の中に浮かんでは消えた。それにつれて、遣る瀬の無い感情が込み上げて、両の目頭の間に集まって来る。その感情は悠人のまぶたを溢れ、ひと滴の涙をステアリングコラムに落とした。
途端、悠人はおかしな感覚に襲われる。身体が座席という支えを失ったかと思うと浮遊感が訪れ、ゆっくりと降りてゆく。驚いて辺りを見回すと、自分を内包していた筈の車体がたちまち色を失い、車外が透けて見えた。
「な、何っ？」
尻にざらついたガレージの床の感触を感じた次の瞬間、今度は自分の身体を柔らかな感触が包み込んだ。
「これまでだって、とっても大切にしてくれたじゃない……」
襟元へ絡み付く細い腕。頬に感じる吐息は、明らかに人間のそれだった。
「……！？」
ＲＸ－７が消えたのと入れ替わりに、そこに現れたのは女だった。あまりの事に気が動転した悠人は、女を突き放し飛び退いた。
「あんっ、あんまり乱暴にしないでよぉ」

軽い尻餅をついた女は、ついた尻に纏(まつ)わり付く埃をはたきながら立ち上がる。西日を背に受けたその姿は、悠人の目には黒いシルエットに見えた。

「……姉さん……？」

目映(まばゆ)さに目を細めた悠人には、女の白い着衣だけが印象深く見えた。それは、怜奈がたまの休日に好んで着ていた、ボディーコンシャスなワンピースの内の一着だった。

「この姿で会うのは初めてかしら……？」

女は、長い黒髪をかき上げると、ファッションモデル宜しくポーズをとって見せた。

「『ナナ』よ。これからも大切にしてねっ」

そう言いながらウインクをすると、女は嬉しそうに悠人を見詰めた。

第二話　神様、仏様、ナナ様？

「……だっ、誰？って言うか、その服姉さん……？それに、セブンは！？」

混乱で、問いの言葉が正しい文脈を成さない。忽然と姿を消したRX‐7の換わりにそこに居いたのは、なんとも軽薄そうな女である。

『ナナ』と名乗るその女は、感慨深げな表情でしばし悠人を見詰めていたが、ふと、何かに納得した様子で小さく頷（うなず）き、先程とは打って変わって静かに話し始めた。

「君が怜奈自慢の弟君よね。怜奈が亡くなった後、君のおかげで私は人手に渡らず済んだ訳だ……」

悠人には、ナナの言っていることの意味が分からなかった。怜奈の亡くなった後、どこかで知り合っていたのだろうか？しかし、「私は人手に渡らず済んだ」とはいかがなものか。自分を物の様に言う。

怪訝な、もの言いたげな、それでも言葉の出て来ない様子の悠人の心中を察したのか、ナナは自分の事を語りだした。

「混乱しているみたいだから自己紹介しておくわ。私は、東洋工業株式会社製造、E‐SA22C型、サバンナRX‐7。君の、そして、君のお姉さんの宝物だった車――の、付喪神（つくもがみ）よ」

『付喪神』。その言葉に、目をぱちくりさせる悠人。

「――ツクモガミって、あの、妖怪カラカサとか？」

耳慣れない言葉ながら、どこかで聞いた事の有る単語。人が、到底人格の存在し得ないものを長きに渡り大切に扱ったり、或いはぞんざい扱ったりする事で宿ると言う、物の怪（もののけ）の類（たぐい）の事だ。

「ちょっ、妖怪って！失礼なっ」

「わっ、ごめんなさい！！」

ナナがこぶしを振り上げて怒りを見せたことで、思わず身を伏せ

て縮こまる悠人。恐怖と言うよりも、条件反射に近い。
「うわっ、もっと失礼っ！取って喰ったりしないわよ！これでも、一応『神』って付いてんだからっ」
「いや、『普通に街を歩いている派手めのオネーサン』にしか見えないけれど……見えないのですが、それより、うちのセブンはどこへ行ったのでしょうか？」
『神』と聞いたせいか、急に言葉が敬語になる悠人。突然の事で言葉はぎこちないが、言っていることは至極当たり前の反応である。車が大切な悠人には、愛車が行方知れずになってしまった事の方が一大事だ。
「だからぁ、私がそのセブンなのっ。変身したのよ、変身っ！」
「あっ、そっか。それなら、セブンが無いのも当たり前ですよね……？」
一旦は合点のいった様子だが、今一つしっくり来ない。
「ん？……えぇっと……それって……セブンはあなたで、あなたはナナさんで、ナナさんは付喪神で――」
「もう少しっ、もう少しよっ。もう少しで理解出来るのね！？」
ナナの身体にも力が入る。彼女にとっては、万事、自分と言う存在が理解される事から始まるのだ。
「うぅーん」
「どう？もう少し？」
ナナの顔が段々悠人の顔に近づいてゆく。
「う――むぅ。セブンはナナさんだから――」
「ど、どうっ？」
気持ちが前に出てしまうのか、更に近づく。
「うぅ――――――ん」
「どう？イケそう？もう少しでイクのっ？」
ますます近づく。
「うぅぅぅ――――――――――ん」
「あぁ――――――んっ、焦らさないでぇ」

これでもかと近づく。
「いや、駄目だ。頭の固い僕にはまるで理解出来ない」
ナナは、酷く落胆した顔で悠人を睨む。
「えぇいっ、この意気地無し！そんな事でこのレベル高めなオンナをモノに出来る訳無いじゃない！！」
「ゴメン、僕はダメな男だったよ。これからは強く激しく逞(たくま)しい男に――――って、あれ？今、そう言う話じゃなかった筈……」
ニヤニヤと悠人を見詰めるナナ。
「ふふっ、悠人って可ぁ愛いぃ」
悪戯で無邪気な笑顔。外で風に揺れているヒマワリが、薄暗いガレージの中にも咲いた様だ。
「なっ、何ですか……？」
気が付けば、鼻先が触れ合う程に迫っているナナの顔に、どぎまぎしてしまう。気恥ずかしくて視線をそらすが、性格は兎も角、ナナが、いわゆるかなりの『美人』であることは判る。腰に届く程の長い黒髪は艶やかで、身の細さに対し不自然な程ふくよかな胸。裾から胸元までジップアップになっているワンピースが、胸の弾力で勝手に開いてしまいそうなくらいだ。
「もう、敬語遣わなくて良いって……ねぇ、それより、私の生まれたままの姿……見てみない？」
甘たるい声で、悠人の耳元に囁くナナ。短い時間の間に色々な事が起こり過ぎており、悠人は混乱で理性が吹き飛んでしまいそうだ。
「いや、べ、別に、興味無いからっ……」
脂汗が滲み、視線も定まらない。車に夢中で、あまり異性との係わりを持って来なかった悠人にとって、ナナの一挙手一投足はことさら刺激に満ちたものだった。
「嘘っ。興味無い訳無いじゃない。きっと、私の事をもっと解って貰えると思うの。さぁ、見て……」
悠人は生唾を飲み込んだ。これから起こる『何か』への期待と不安で、思わず目をつむる。

「ねぇ、見て……目を伏せていたら見えないじゃない……」
再び、艶っぽい声で促す。その声には既に逆らえず、半ばやけで、ゆっくりと目を開く。
悠人が目を開くと、そこに在るのは、消え失せた筈のＲＸ－７だった。
「ねっ、興味有ったでしょう？」
愛車が戻った安堵感で、ひとしきり頬を緩ませる。
「ねぇってばぁっ」
返事を催促する声に辺りを見回すが、ナナの姿は無く、声のする方には一台の車が在るだけ。そろりと近づき車体の中を覗き込んでみるが、彼女は居ない。
「だから、私がセブンなのっ。まっ、取り敢えず乗ってみてよ」
やはり、声だけが聞こえる。怖いながら、仕方なく運転席に乗り込んでみる。
「ねっ、これで信じてくれる？」
「うわっ！！」
ゴンッ。
一瞬にして助手席に現れるナナ。足を組んで座っており、こちらに向かって小さく手を振っている。驚きのあまり、サイドウィンドウに後頭部を強打した。『瞬く間に』と言う言葉が、こんなにもしっくりといくことが他に在るだろうか。
「いったぁ……」
「うん、もうっ。大丈夫？」
言うより早く、悠人の頭部を抱え込む様に両手を添えて労るナナ。すると、ふわりと懐かしい匂いが鼻孔をくすぐる。あの、怜奈が付けていたコロンの香りだ。
「あっ……姉さんの匂い……」
聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟く。その言葉を聞き逃さなかったナナは、はっとした表情で身を引くと、俯いてしまった。
「ごめんなさい、ふざけ過ぎちゃった。でもね、本当なの。この匂

いは、多分、本当に怜奈の匂いだと思う。私、この車としてずっと怜奈のそばに居たから――移り香ね、きっと」
急にしおらしくなったなったナナだが、悠人には、そこに先程までのオフザケは無い事が判った。
「本当に、君はセブンに宿っている神様なの？」
こくりと黙って頷くナナの姿は、さながら、首を垂れる散り際のひまわりだ。
「あのさ、まだ、良く信じられないけれど――――そうだっ。取り敢えず、ドライブにでも出かけない？」
他に何と言って良いか判らなかった。ただ、目の前の女性を落ち込ませたままにはしておけない。無性にそう思えた。
「へっ？」
前触れも無い提案に面食らったが、それが悠人の優しさなのだと思うと、怜奈の弟自慢を聞かされていた頃の事が思い出されて、何だか嬉しい。
「あら、奥手かと思っていたらいきなりデートの誘いだなんて、見くびっていたかしら？」
思わず飛び出した自分の言葉に恥ずかしくなり、挑発的な瞳で見詰めるナナの顔を見続けられなかった。
「いや、そのっ、この時間からなら、夜景を見に行くのにも丁度良いと思って……あっ、じゃない！余計いやらしく聞こえるっ。違うっ、そうじゃなくって――」
慌てながらも照れ臭そうな悠人の素振りが、何とも愛おしく感じる。
「ふふ、真面目なんだから――――そうね……連れて行って、夜景」
ナナの微笑みを返事と受け取った悠人。気を取り直して、優しくクラッチペダルを踏み込みシフトレバーを一速へ導くと、ＲＸ-７を走らせ始めた。
初めてこの車を走らせるという感動はすっかり掻き消されたが、不思議と苦々しくは思わなかった。むしろ、数年振りに最愛の姉と

再会出来た様で、心は満たされていた。

第三話　白い雌豹

「あんっ、もっと優しく……」
びくりと身を縮め、顔をしかめて訴えるナナ。
「こう？」
ナナを気遣い、可能な限り彼女の求めに応えたい。悠人は指先に神経を集中し、精緻（せいち）な動きを見せる。
「あっ、そう……そんな感じで……んっ、そっ……上手よ」
一転、ナナは恍惚とした表情を浮かべ、声が途切れ途切れになる。その不規則な呼吸が、うつむいて頬に掛かった髪を小刻みに揺らす。
「良い……上手よ、悠人ぉ……」
車内に響く甘い声。白く、染み一つ無い美しい肌がほんのりと赤く色付いてゆく。
「これはどう？」
「んっ、その動き、凄く良いぃ」
快感に腰をくねらせるナナ。動きに合わせてシートも軋み、不規則さが段々と一定のリズムへと変わってゆく。
「あの……どうでも良いけれど、もう少し普通に話して貰えないかな？いちいち、そんないやらしい声出さないでよ」
「もう、解ってないわねぇ。私は車なんだから、上手に運転されたら気持ち良くなるに決まってるじゃない」
ナナの指導の賜物か、この気難しい車を随分とスムースに乗りこなす様になった。手足の指先が、その役割毎に絶妙な働きをし、アクセル、ブレーキは勿論、山坂道での頻繁なシフトチェンジにもストレスを感じなくなった。
「……はぁ、じゃあ、運転に集中したいから、少し静かにしていてくれる？」
「えぇぇぇ、悠人ったら冷たぁいぃ」
悠人は、昔よく怜奈に連れられて行った、車で数十分程の距離に

在る、『三敷峠（みしきとうげ）』を目指していた。三県の境を跨ぐ山道で、道幅が広く起伏の緩やかな国道が出来てからは旧道として扱われ、通行する者は、一部の『物好き』達を除いてほとんど無い。
「あ、この景色久し振りっ！ねぇ、見て見てっ。三敷レッカーの看板、新しくなってるぅ。儲かってんのねぇっ」
「いや、それはあまり良い事じゃないから……」
七年間、ずっとガレージの中に居たナナにとって、久し振りの外界は道端の看板一つとっても、懐かしかったり、目新しかったりと、心を躍らせる物であった。
「……それでさ、話は戻るんだけれど、じゃぁ、ナナはさ、姉さんがこの車に乗っていた頃には、こんな風に話をしていたんだよね？」
タイミングを計って、真面目な話題に戻してみる。
「そうよ。その時はもう、付喪神になっていたわ。怜奈の前のオーナーは男だったんだけれど、そいつが、ちょっと金持ちでさ、コレクション扱いでほとんど乗ってくれなかったの。で、たまに乗ったら、凄く運転下手だったのよ。挙句の果て、１２Ａ（ＳＡ型標準のエンジン）をブローさせて、『傷物は要らない』って、捨てられちゃった……エキセン（エキセントリックシャフト。一般的なエンジンのクランクシャフトに相当する）がボッキリ折れて」
「そっか……」
腹立たしそうであって、また、諦めの感情とも取れる口調のナナ。本当は姉の事を聴こうと思っていたが、ナナの身の上を知るのも悪くない。
「存分に走って、車としての役目を果たしたと感じられたなら、他の車達と同じ様に廃車されて良かったわ。でも、私は何の為に生まれて来たのか分からなくなっちゃった。……その頃なの、私がこうなったのは」
窓の外を流れる景色をぼんやりと眺めながら、ナナは続けた。
「……多分ね、私みたいな付喪神って、恨みから生まれるじゃないかな。『祟り』って言うやつ」

「うん……僕もそう思う」
同情ではない。自分を一人の車好きとしてその男に置き換えてみたら、自分はナナをもっと大切にしてやれただろうか？或いは、修理代や車両の年式と、車を買い換えた場合のメリットを天秤に掛けて、やはり、ナナを捨てただろうか……？
「だから、人間に復讐をね……けれど、その後すぐに怜奈と知り合ったから、そんな気分の悪い事しないで済んじゃった」
ナナの話を聴きいて、優しく相槌を打ち続ける悠人。
「それで、怜奈が『源さん達の時代はペケナナって呼ばれていたらしい』って言って、そこから私に『ナナ』って言う名前を付けてくれたんだ……って、ごめん。本当はこんな話聴きたい訳じゃないよね。人と話すの久し振りだったから、つい……。聴きたいのは『怜奈がどんな運転をしたか？』でしょ？」
ナナも、悠人の気持ちを汲んでいない訳ではなかったらしい。ただ、彼女のお喋りも、色々なものを抱えているからなのだろうと、変に納得出来てしまう。
「いや、それも有ったけれど、ナナの話を聴きたくないなんて事無いよ。まだ、それでも信じ難いけれど、ナナは僕にとって大切なセブンだから……でも、その話はまた後で。さぁ、着いたよ」
話に夢中で、車が停車した事に気が付かなかった。
悠人がＲＸ‐７から降りた事を確認すると、周囲にひと気が無いのを見計らって、完全な変化（へんげ）を行った。車体が見る見るうちにナナの姿へと形を変えてゆく。
車内ではＲＸ‐７の車体とナナの肉体の実体を同時に維持出来るが、あくまで一体であるから、車両から離れてナナとして存在する事は出来ないらしい。
「わぁっ、綺麗っ！」
峠道を頂上付近まで登った所に在る、見晴らし台。辺りはすっかり暗くなっており、木製の柵の方へ近寄ると、眼下に街の明かりを見渡す事が出来た。

「姉さんに良く連れて来て貰ったんだ……あ、でも、ナナも、いつも一緒だったんだよね」
恥ずかしそうに頭を掻く悠人。
「うん。私に乗って来てたんだから。でも、良いの？この場所って怜奈の……」
「そう、このちょっと先の所だね。分かってる。いつかは、向き合わなければいけないと思っていたから……けど、ナナの方が嫌かな？その時そばに居たんだから……」
「ううん、良いの。嬉しい。私にとっても怜奈との思い出の場所だから。怜奈と二人でも結構何度も来ていたしね……」
その話に違和感を感じて、目の色が変わる悠人。
「ねっ、待って。こんな山の中、二人きりで何回も来ていたの？たまにじゃなくて？」
「そりゃ、怜奈ってこの辺りじゃなかなか有名な……」
そこへ、甲高い音をさせて、黒地に赤いバッジが際立つ、一台の車が停まった。
「おい、君！『白い雌豹』の連れじゃないか！？」
車を降りて話し掛けて来たのは、高そうなスーツを着た三十代くらいの男であった。
この黒インテ（インテグラタイプR）は、いつだったか見た覚えがある。インテRの黒色はあまり見掛けないから、印象深かった筈なんだけど……。
ナナは、それがいつの事なのかどうにも思い出せない。曲がりなりにも『神』だと言うのに、物忘れとは我ながら気分の悪い話だ。
駆け寄って、再び問いかけて来る男。
「なぁ、君は白い雌豹といつも一緒に居た人ではないか？」
「ちょっと、何よっ？出し抜けに……」
白い雌豹？悠人には何の事が分からなかったが、ナナにはその言葉の意味が通じている様子だった。
男は、身なりを整えて咳を一つすると、言葉を選ぶ様にして話し

始めた。
「私は、この辺りをメインに走っている酒井と言う者だ。数年前に、付近で轢き逃げ事件があったのだが、君がその被害者と一緒に居た女性に、とても似ていたんだ」
「だとしたら何かしら？あなた、別に刑事とかじゃないんでしょう？」
酒井に対し、やたらと突っ掛かるナナを、悠人がたしなめる。
「ちょっと、ナナ。そう突っ掛からなくて良いんじゃないかな。取り敢えず、話を聞いてみたら？」
「私、金持ちっぽくて偉そうな奴嫌いなのぉ」
あぁ、納得。前の金持ちオーナーに惨い捨てられ方したんだっけ。
悠人はナナの態度に合点がいった。
「気を悪くしたなら申し訳ない。あまり人と話す事が得意な方ではないから、何と言って良いか……」
「気になさらないで下さい。それより、その被害者と言うのは、多分、僕の姉の事かと思うのですが……？」
酒井は、目を見開いて悠人の顔を見つめる。言われてみると『白い雌豹』の面影がある。
「あぁ、これは幸運だ！私は、あの事件以来、頻繁にここへ通って来たんだ。あの後、『白い雌豹』がどうなったのか、知りたい一心で」
「あぁっ！思い出した！！あんた、おっきいダイヤの指輪持って来て、いきなり怜奈にプロポーズした図々しい男っ！！」
「なっ、何だ図々しいとは！？私は、気持ちに正直なだけだ……っと、待ってくれ。彼女はレナと言う名なのか？これは、良いことを聞いたっ」
悠人は、目を丸くした。
「姉さん、プロポーズ受けたの？」
名も知らない異性に、プロポーズ出来る神経とはいかなるものだろうか。

「ほら、あのコって優しかったから……」
「えっ、『優しかったから』って？ＯＫしたの！？」
その悠人の問いに答えたのは酒井だった。
「『私より速いなら』と言われた。だから、腕を磨いて後日勝負を挑もうと思っていたら……」
「怜奈に会えなくなった訳だ」
酒井は静かに頷いた。その表情は無念さに溢れている。
「で、どうなった？助かったのか、彼女はっ？」
そうか、この人は姉さんが亡くなったことを知らないんだ。それでずっとここで待っていて……。
悠人は、その横柄さは決して好かないが、酒井が姉を真剣に想っていてくれたのだと、それだけは凄く良く解った。
「ねぇ、酒井さん。『白い雌豹』って姉さんの事なんですよね？姉さん、走り屋だったんですか？」
「あぁ。この山では、今でも一番の速さだろう。誰が付けたか、彼女のクールな印象と車名の『サバンナ』から由来して、『白い雌豹』と呼ばれていた」
驚いた。自分の姉にそんな通り名が有ったとは。車に強い執着心を持っている人ではあったが、正直驚いた。
「それで、彼女は今どうしているんだい？」
そう、それを聞きたいのだ。
「……僕と走って下さい」
悠人は、小さな声で呟く。
「ん？」
「僕とっ、僕と走って下さい！あなたが僕に勝ったなら、今、姉がどうしているかお教えします」
思わず、ナナと酒井は顔を見合わせる。一体、何を言い出すのか。
「待ちたまえ。何故、そうなる？それは、白い雌豹の弟と走れるのは光栄だと思うが、『免許を取って何年も経たない』様な歳に見えるが？」

「はい、今日交付されて来ました」
酒井は、大きな溜息を吐(つ)いて答えた。
「それでは話にならないだろう！？幾ら私が白い雌豹にまだ勝った事が無いとは言え、あまりにも失礼ではないかっ？」
酒井の怒りはもっともである。免許取立ての小僧が、己を弁えず勝負を挑んで来たのだ。
対してナナはと言えは、最初こそ驚いたものの、既に悠人の心中を汲んだのか、黙って聞いているだけだ。
「失礼を承知で、それでもお願いしたいんですっ。どうか！」
「……ふぅ。ところで、君は学生か？……そう言えば、車はどこだ？」
キョロキョロと辺りを見回して車を探すが、それらしい物は見当たらない。
「高校三年生です。車は……姉が乗っていたセブンです」
「そうか。分かった。では、来週の土曜日、午前三時に、麓(ふもと)の自動販売機前で会おう。上りを一本。こっちもターボ仕様だが、ＦＦ（前輪駆動）だ。そのトラクション（路面に伝達される駆動力）の差がハンデ（ハンディキャップ）と言うことで良いか？慣れない者には下りは危険だからな」
「ええ、有難う御座います。……手加減は無しですよ」
「あぁ、分かっている」
最低限の取り決めをし、二人の男は決戦の日を約束した。

第四話　友の視点

今日の校舎は、普段とは違いざわついていた。まだ、ホームルームの時間だと言うのに、生徒達は落ち着きが無く、あちこちの教室で教師の大声が飛び交っている。

「ほら、皆っ！静かになさい。まだ終わってないわよ！！」

特段不良生徒の多い学校という訳では無いが、生徒達にとっては、心躍る特別な日なのである。悠人の教室でも、お喋りやよそ見をする生徒が絶えず、担任の教師が女ながらの高い声で、叫んでいた。

「なぁ、悠人っ。この後、ファミレス付き合えよ！俺、バイト代入ったからおごるっ、な？」

後ろの席に座っている浩介（こうすけ）が身を乗り出して、小声で話しかけて来た。悠人は教壇の方を向いたまま、更に小声で答える。

「ごめん。気持ちは嬉しいけど、今日は用事があるんだ。……それより、先生がこっち睨んでるよ」

浩介は、納得がいかなかった。

いつもなら、悠人が家に真っ直ぐ帰る気持ちも解かる。養子――と言っても、実の父母との繋がりである姓を変えさせてはかわいそうだという配慮から養子縁組はされていない――の身で、少しでも恩返しをしようと工場の手伝いをする為だし、養父母に負担をかけまいと、進学の際に特待生となれる様、勉学も両立している。親友として、そんな悠人を尊敬し、誇らしくも思う。試験前には勉強を教えて貰った。だから、解かるからこそ、いつもなら遊びに誘ったりしないのだ。

だが、今日は違う。一学期の終業式で、まだ十二時前だ。昼食を食べに行くくらいの時間が無いものか。「生真面目に工場の手伝いと学業に励んでいる姿は、返って養父母を傷付けるかも知れない」とたしなめた事も有るが、なかなか変わらない。本人にそのつもりが無くても、姉との二人暮しの頃に身に着けてしまった悪癖らしい。

自分は高校に入ってからの友人で、その頃の悠人を知らないが、苦労をして来たのだろうと思う。……駄目だ。悠人の過去に思いを馳せるといつも、目頭が熱くなる。

「こらっ、鈴木浩介！その不真面目な体勢で何をべそかいてる！？私の話がそんなに感動的だったかっ！！」

「うぁっ、スンマセン！！」

教師に一喝され、クラス中から笑われてしまった。連帯責任と認識したのか、悠人も身をすぼめた。だが、教師の声が効いたのか、クラスの生徒達は直ぐに静かになった。

「明日から夏休みと言うことで、開放的な気持ちになる人も多いとは思いますが、進学、就職の進路に係わらず、くれぐれも、己の本分を忘れない様にして下さい。特に、今日までに車の免許を取った人、或いはこの夏に取る人は、あちこち乗り回して、切符切られたり、人様に迷惑を掛ける事の無い様、気を付けてね！」

教師の話はもっともだった。悠人にしてみれば、自分の事を言われている様で気まずい。あれから毎日、三敷峠へ通い走り込んでいる。特待生を目指しここまで頑張って来た悠人にとって、日々の『練習』と言う名の暴走行為は、危ない橋以外の何物でも無い。事故も怖いが、一度でも警察に補導されれば、これまでの勤勉は無駄になってしまう。だが、今はどうしても走らなければならない理由が有る。

そう、思案していると、窓際の男子生徒達が再びざわつき始めた。

「……あの女誰だ？ほら、あのサングラスの」

「うわっ、スカート短けーっ」

男子生徒達の騒動に、教師もその方向を見遣る。もう少しで下校時刻と言う事も有り、校門付近には向かえの父兄達が待つ車が数台見えるが、その中でも一際目立つ、白いスポーツーカーとその傍らに立つ女。

窓際より一列内側の席に座る悠人は、窓際の生徒達が見せる反応に不安がよぎり、自分も腰を少し上げて皆の見る方に目を向けた。

うわっ、何でこんな所にっ！？そもそも、どうしてナナとセブンが両方実体化しているんだっ？

悠人の不安は的中、そこに居たのはナナだった。こちらに気付いたのか、サングラスを取り、手を振っている。

悠人は、腕を交差して『バツ』を作ったり、手の甲を振って追い払う素振りを見せて、どうにかナナを帰そうとした。あのスタイルの良い身体と派手な服。そんなナナへ自分が歩み寄って共に学校を後にしようものなら、変な噂が広まり恥ずかしくて二学期に登校出来ない。

「えっ？悠人の迎え？」

だが、そんな思慮は徒労、いや、逆効果だった。悠人のナナへの身体を使ったサインは、明らかに不自然な行動であり、注目を集めたのだった。

「もしかして、悠人のカノジョ！？どこであんなイイオンナ捕まえたんだっ？」

「えっ？ちょっと、違うよっ。そんなんじゃないってっ！」

もっぱら、男子生徒は羨望の声を上げ、女子生徒はそんな男子生徒達に呆れ無視している。

へぇ、そういう事かぁ。真面目なだけの子かと思ったら、なかなかやるじゃない。

教師は、悠人の真面目過ぎる性格を憂いていた為、恋人が居るということは喜ばしく思った。しかし、高校三年生のこの大事な時期に、彼の素行に悪影響が出ないとも限らない。

「よしっ、皆、これで終わりにしますっ。『礼』も省略、帰って良し！」

どっ、と歓声が沸き起こり、生徒達はカバンを持って一斉に席を立った。

「おっと、速水悠人！この夏、あなたは特に気を付けなさいっ。初心者はハマり易いのよっ、クルマもオンナも」

帰り際、悠人以外の生徒達は大爆笑だった。なかなか、機知に富

む話だが、悠人は顔を真っ赤にして教室を駆け出た。
そっか、そういう事か。それなら良かった。親友として祝福するぜ。でも……親友よりもオンナを選ぶとは……羨まし過ぎる。
羨みながらも、悠人を笑顔で送り出す浩介であった。
「ちょっと、ナナ！どうして来たのさ！？それに、さっき、両方実体化してたじゃないかっ？」
人生で最も速く走る事が出来たのではないかと思う程の身のこなしで、悠人はＲＸ－７に乗り込み、一目散に走り出した。
「だってぇ、今日は早く終わるって言ってたからぁ。早く会いたかったのぉぉぉっ」
甘えた声で答えながら、悠人の太ももの辺りに指を這わす。
『早く会いたかった』など、悠人をからかう事が趣味みたいなナナの言葉だ。悠人には、まるで信じる事が出来ない。脚に触れるナナの手を払うと、「疑わしい」と言わんばかりの目付きで、ちらりと助手席を見る。
「もうっ、本当なのにっ！……それに、今日が練習出来る最後の日よ。工場の仕事だって、今日は源さんが居ないから無いんでしょう？折角明るい内から時間が出来たんだから、このまま三敷峠へ行って走り込むのよ」
「うん。おじさんが商工会の集まりで居ないから、工場の仕事は無いけれど……そっか。だから、抜け出せたのか」
疑問にも思っていなかった事に気付いた。
「でも、この時間じゃ流石に危ないよっ。旧道とは言っても、少しは一般車が走っている筈」
先程の教師の話もあり、悠人としては受け入れられない提案だった。
「安全運転でも、それなりの練習が出来るのよ」
ナナは、諭す様に優しく答えた。
「あ、でも、おじさんが居ない時こそ、工場を掃除したり、工具の整備をしておこうと……」「そういう甘えないで頑張り過ぎるとこ

ろ、源さん達を傷付けているんじゃない？」
悠人は、自ら誰かに甘えようとはしない。だが、それは源一郎夫妻にとっては残酷な事だ。いっそわがままを言ってくれた方がどれだけ嬉しいか。いつ、家族になる事が出来るのか。
そう言われれば反す言葉も無い。浩介にも幾度と無く言われて来た話だ。その場はもっともだと思うのだが、これが中々上手く実行出来ない。そうだ、こういう事から一つひとつだ。今日はナナの言葉に従おう。だが、それはそれとして、まだ疑問が残る。
「じゃぁ、もう一つ。どうしてさっき、ナナとセブン両方実体化出来ていたの？車外に居たのに」
「別に、車と離れ離れになれないだけだから。さっき、セブンに寄り掛かっていたでしょう？」
それだけの事らしい。
「あ……そう……」
また一つ、付喪神ナナの事を知った一学期最後の日。そして、約束の夜を控えた金曜日。
あ、だったら浩介と食事に行きたかったな……。

第五話　通わない心

終業式を終えた金曜日、学校から三敷峠へと直行した悠人とナナは、酒井との勝負を当夜に控え、練習も最終調整に入っていた。

「さっき見たストレート手前のコーナーは、もっと積極的にインを使っても平気ね」

「うん、あそこの路肩はU字溝が草に覆われていたけれど、コンクリートの蓋がしっかり掛かっていて踏める。昨日までのアタックじゃ、暗くて判断がつかなかった」

二人は、決戦の場である三敷峠を、麓の自動販売機前から頂上付近の見晴らし台まで、既に幾往復も済ませている。ナナの提案で、この夕方までの明るい時間に、法定速度以下の極めて安全な走行を繰り返し、攻防のポイントとなりそうな場所は、車を降りて見て歩いたりもした。この一連の作業には、路面の細かな状況を把握する意図が有る。

「ね、こういう練習もアリでしょ？昔は、こうして怜奈と一緒に走ったわ」

ヒグラシの声が増え始め、陽光の傾きが実感される頃、麓へ降りて来た二人は、自動販売機前の縁石に腰を掛けてここまでの走行について気付いた事を話し合っていた。縁石の際（きわ）に沿って停められたRX-7は、ハザードランプを点滅させながらナナの背もたれになっていた。

「あの頃とはまた、アスファルトの亀裂だったり、土ぼこりや小石の溜まり方だったり、路面のコンディションが違うわね。直前にしなきゃ意味が無いし、今日は丁度良かったわ」

「季節にもよるしね。まだ、枯れ葉が積もる時期でなくて良かった」

この一週間、工場の手伝いや勉強を手早く終え、少しの睡眠を取ってから深夜に三時間程走りに来る、それを繰り返して来た。『白い雌豹』と呼ばれた姉の走りを知り尽くしているナナの指導は、車

両自身としての感覚も相俟(あいま)って、とても効率の良いものであった。
酒井に勝負を申し入れた時点で、別に、悠人にはナナを頼るつもりなど無かった。ただ練習を重ね、自己の努力によって少しでもましな走りが出来る様になろうとは思っていたが、存外、ナナが良いトレイナーになってくれた。そう事であった。
「じゃぁ、あと一往復したら一旦引き上げよう。エンジンオイルとブレーキパッドを交換して、タイヤも前後ローテーションする」
首を反らして冷たいミルクティーを飲み干すと、ナナの手に在った空き缶も引き取り、自動販売機の脇に据えられたくずかごへ投げ入れる。そうして両手が空くと、軽く尻を払って再びＲＸ－７に乗り込んだ。
「この前から思っていたんだけれど、ナナってさ、『付喪神』って言っても、飲んだり食べたり人間と同じ事が出来るんだよね。他にも何かそう言う事有るのかな？」
カチャカチャとシートベルトをしながら、ここ数日頭に有った疑問をぶつけてみた。ちょっとした好奇心でもあるが、今後ナナと接してゆく上で、何か気遣うべき事は無いだろうかと考えた、悠人なりの優しさだ。
「あら？随分と興味を持ってくれるのね。嬉しいっ」
ナナは、得意げな顔で続けた。
「そうよ。人間と同じ物が食べられるし、お化粧も出来るし、今着ている服は怜奈に貰ったヤツだけれど、必要が有れば着替えも出来るしぃ……それに、お風呂だって悠人と一緒に入れるしぃ……」
「いや、一緒じゃなくて良いし」
からかっているつもりか、ナナは度々卑猥な話題に誘導する。どうしてもそういう話題に慣れられない悠人は、努めて興味の無い風の態度を見せた。
「そのまま二人で甘い夜をしっぽり過ごす事だって」
「だからっ、そんな話までしてないってっ」
エスカレートしてゆくナナに対し、語気を強める悠人。その言葉

に、ナナも心外そうな顔をする。
「うっわぁ、冷たい言い方するんだぁ。質問に答えただけなのにっ。そういう態度をとるなら、じゃぁ、私もずっと気になっていた質問よっ」
悠人をギロリと睨みつけると、その視線を外さずに続ける。
「悠人はどうして黒インテに勝負を挑んだの？勝負事を好むタイプじゃないし、初心者マークべったりの悠人がどうこう出来る相手だとも思わなかったでしょう？この山で一番速かった怜奈と、確か、あいつだけは競り合っていたわ」
クラッチペダルを踏み込み、ギヤが一速に在る状態であったが、シフトノブをニュートラルの位置に戻して発進の動作を中断した。
『冷たい言い方』と言うナナの言い分を真に受けた悠人は、申し訳無さそうに視線を下げる。
「ごめん……別に、冷たい言い方をするともりは無かったんだけれど、変なこと言うからさ。別に僕も、この山を何年も走り込んでいる人と、まともな勝負が出来るなんて思っていないよ」
悠人の態度を見て調子に乗ったナナは、わざとらしく高飛車なもの言いをする。
「あぁらぁ……ふぅん……そう。なら、どうしてあんな事を？」
助手席から身を乗り出し、したり顔で悠人の顎に指先を這わせるナナ。
流石にこの態度にはムッとした悠人だが、先程の事も有り、いつもの事と諦めて話を進めた。
「多分、酒井さんはまだこの車のテールランプを追い続けてる。いつか追い抜いて、もう一度姉さんにプロポーズしようって」
ふと、悠人の顎に悪戯をしていたナナの指が止まる。
「それで？」
ナナは、悠人の顔を覗き込んで問い続ける。
「だからさ、気持ち良くこの車に勝って貰って……」
「『だから』、その代役を買って出たの？」

ナナにとっては思いもよらない答えだった。そんな事の為に毎日走りこんで来たのか。
「代役って言うのも違うかな。もう、三敷最速の雌豹は居ない。それが解って貰えれば良いんだ……」
ハンドルの革をそっと撫でながら、力無く答える。悠人の意識はすっかり姉との思い出に捕らわれ伏し目がちだ。
「怜奈を諦めて欲しいだけなら、悠人が毎晩練習する必要も無かったんじゃない？」
「一所懸命になって、それでも僕は敵(かな)わないんだ。それが、酒井さんにとって全ての答えになると思うから」
悠人の理論からすれば、怜奈が運転していた頃にはあの黒いインテグラに一度も敗北しなかったこのＲＸ-７が、自分の運転によって大敗を喫したなら、酒井も幻滅して怜奈の死を受け入れ易くなるのではないかと、そう言う事らしい。
「ちょっ……馬鹿じゃないっ！やっぱり、そういう発想はお子様よねっ！！」
ナナは顔を真っ赤にして声を荒げた。急激な表情の変化に、悠人は狭い運転席を後ずさった。
「まったく、何様のつもりよっ。そんなくだらない気を遣うくらいだったら、『怜奈は死んだ』って言う事実だけ伝えた方がよっぽどマシよ。でも、違うでしょ！？『いつまでも、姉さんの影に縛らないで欲しい』って伝えたいんでしょうがっ」
ナナがどうしてこんなに怒るのか、悠人には理解出来なかった。そんなに自分は間違った事を言っただろうか。
「だったら、思い切り勝って、今は怜奈じゃない人間がこの車を乗りこなしているんだって、解らせてあげたら良いじゃないっ。負ける前提で臨む勝負なんて、何の感動も呼ばないんだからっ！！」
そう言って、ナナは車の中に引っ込んでしまった。
「あっ、ちょっと、ナナ？」
それきり顔を見せなくなってしまった。呼ぼうと触ろうと、返事

は無い。
「参ったな……」
決戦を当夜に控えているにも関わらず、二人はすっかりすれ違ってしまった。
これって、正(まさ)しく『車と心が通わない』ってやつだよなぁ。悪い事しちゃったな……。
悠人は、もう一往復する筈だった予定を切り上げて、自宅へと車を走らせた。

第六話　Ｖの哲学者

それ以来、一度も口を利こうとしないナナの態度は、悠人を深く気落ちさせた。帰りの道での沈黙はどうにも耐え難く、特に、ガレージへ帰ってからのそれは、七年にも亘(わた)り培われて来た、悠人の自動車整備の手並みをも酷く鈍らせた。

元来、他人に依存しようとしない性質の悠人は、一人で居る事も苦にはならない。そして、それは今も変わらない筈だった。しかし、この一週間、学校に居た時間以外の殆どをナナと共(とも)に過ごして来たせいで、彼女がぱたりと現れなくなった今と言う時間に、強烈な違和感を抱かずには居られない。

落ち込んだままの悠人がＲＸ‐７の整備を終えた頃には、工場の柱に掛けられた時計の針は、二本ともが真上を指し示していた。一連の作業に、普段の倍はかけたのではないだろうか？常日頃から丁寧な作業を心掛けている悠人にしてみれば、決戦前とは言え特段作業に気遣いを増した訳ではない。ただ、ボルトを狭い所へ落としてみたり、工具箱に足を掛けて引っ繰り返してみたりと、滅多にしない様なミスを幾度も重ねた。

手袋を外し、ツナギになっている作業着のジッパーを腰まで下げると、腕が抜かれだらりと下がった袖同士をへその辺りで結び、下に着ていたシャツをばたつかせて扇いだ。

「ふぅ、暑ぅっ……シャワー浴びてから行った方が良いかな」

呟く自分の言葉にふと気が付き、ＲＸ‐７を見遣る。こんな何気無い独り言にも、何かしらの反応を示した筈のナナだが、今はやはり返事が無い。滲む汗で、白いシャツが肌に纏(まつ)わり付き、一見華奢に見える悠人の、存外引き締まった胸板を露わにした。

そうしてＲＸ‐７の前にぼんやり立っていたところで、スーツ姿の着崩れた源一郎が、ふらりとやってきた。

「おぉ、灯りが点いてたから来てみりゃ、ゆうちゃん、こんな時間

までそいつを弄ってたのかぁ」
頬が赤く陽気な面持ちの源一郎は、一目で酒を飲んで来た事の分かる足取りであった。
「あ、おじさん、おかえりなさい。集まりの後は飲み会だったんだ？」
「ん？あぁ、飲んで来た。皆、気の良い連中なんだが、この景気の悪さのせいで愚痴が多くてな。『愚痴る間に一軒でも営業に回りやがれ』ってぇ、説教垂れて来たわ」
尊大な物言いの様で、その実、奥に寂しさを秘めた表情が、悠人には痛々しく見えた。
「そっか。どこも大変なんだ……」
自分の生まれ育った土地が、昨今の景気低迷を受けて苦しんでいる。なんと口惜しい事か。
「本当に、ウチの場合はゆうちゃんのおかげで保っている様なものだからなぁ」
梶モータース繁盛振りは、この地域にして稀有なものであった。子供の頃から工場を手伝って来た悠人に対して、始めこそ、その様子を危険視する客も多かったが、次第にその仕事の確かさから、店の評判を高めるまでになった。危険度の高くない仕事であれば、悠人一人に任せ、源一郎は周辺の商店や工場、その他企業を訪問して回り、車検整備などを受注して来る。こうして、二人三脚の営業が梶モータースの屋台骨となっているのだ。
「そんな事無いよ。おじさんの外回り有ってこそだから……」
「謙遜するな。現に、そこのフィットも、むこうのラパンも、あそこのベリーサ、……あぁ、そっちのＢＭ（Ｗ）だって、女性客で常連になってんのは、ほとんどがゆうちゃん目当てだ」
ＲＸ-７の隣のピットに置かれた車両や、工場の外に並べられている車両を、それぞれの方向に顎を突き出して指し示した。
確かに、何人かの女性客から食事に誘われたり、高価そうなプレゼントを渡されたりした経験は有る。その度毎に、自分が未成年で

ある事を理由に、「分不相応なプレゼントは受け取れない」と丁重に断ってはいるが、そういう客は相変わらず、走行距離五百キロメートル毎にエンジンオイルの交換に来るなど、無用に入庫頻度が高い。

「兎に角、ウチはゆうちゃん有っての梶モータースだ。それは変わらない。だからな、前にも言ったが……あまり無茶はするなよ……」

『工場の為に悠人に居て欲しい』などと言う前置きは、いかにも昭和の男らしい、照れを隠す口実だ。

「何と言っても怜奈の弟だからな、走りに行くなとは言わない。むしろ、俺達夫婦に気を遣っても欲しくない。ただ、ゆうちゃんは怜奈の分まで目一杯人生を謳歌しなくちゃならない。なのに、今、ゆうちゃんの身に何か遇ったら……」

こうして本音を隠しきれない事もまた、人情厚さの表れとも言える。言葉に出来ない感情が込み上げたのか、酒酔いで赤い鼻を啜り上げて、ふいと自宅へ帰って行ってしまった。

知ってたんだ……二人ともが寝静まった頃に出かけてたのに。……そっか、おじさんならタイヤの減り具合でお見通しだもんな。

玄関へ入って行く源一郎の背を見詰め、悠斗は誓う。

絶対、無事に帰ろう。そして、走りに行くのは今夜で終わりにするんだっ。

使った工具類を片づけて自分も自室に帰ると、一時間程の仮眠をとってから、入浴と身支度を済ませた。

午前三時。三敷峠麓の自動販売機前。

「ナナ。今夜は、いつもより『それっぽいクルマ』が多いと思わない……？」

約束の時間を直前に控えても、やはり、ナナは答えようとはしなかった。

この場所までは、主要な道を信号で折れてからずっと一本道であったが、その道へ入った途端、路肩が広くなっている様な場所には

全て、何かしら車両が停まっていた。大きなウィングスポイラーを着けたスカイラインＧＴ‐Ｒ、１８０ＳＸのフロント部分がシルビアのものに変更された俗に言うシルエイティ、ロールケージで固められたシビックフェリオＲＳ、インプレッサＷＲＸ、ランサーエボリューション、アルテッツァ……など、名を挙げればキリも無く、深夜に多く出没する走り屋と呼ばれる者達ですら、普段ならばその数が減り始める時間だと言うのにである。

「変に活気があるな……」

そこへ、聞き覚えの有る甲高いエンジン音が、似たエンジン音を幾つも引き連れて来た。その全てには共通点がある。ボンネットに輝く『Ｈ』と、車体のどこかしらにある『Ｖ‐ＰＨＩＬＯＳＯＰＨＥＲＳ』の文字だ。

「待たせたな、雌豹の弟」

路肩へ綺麗に並べられたこの一団の車両は、どれもがホンダ車だった。インテグラや、アコード、シビックのセダンやハッチバックなど、ＶＴＥＣエンジンを搭載した車両ばかりで、その中でも先頭の黒いインテグラタイプＲから降りて来たのが、あの酒井である。

「済まん。こいつらがどうしても付いて来ると言ってきかなくてな」

「いえ、僕も来たばかりですから」

ふと、酒井の背後に視線を向けると、十人程度の走り屋風男性が集まっていた。難しい顔をした者も居れば、へらへらした表情の者も居るが、不思議とどの男にも凄みを感じる。

「初めましてっ。俺は、『ブイ・フィロソファース』の遠藤っす。今日はスターターをさせて貰いますからヨロシク」

「……あっ、初めまして。速水悠人です」

酒井の後ろに居た小柄で坊主頭の男が、悠人に自己紹介をして来た。慌てて自分も名乗ったが、それによって、うっかり、酒井には名乗っていなかった事に気が付いた。

「ああ、私も宜しく頼む、悠人君」

悠人の気まずそうな様子を察して、酒井がそう声を掛ける。悠人

は、その少しの遣り取りに酒井の人柄が顕(あらわ)れている様な気がした。
対照的に、遠藤の視線には敵意を感じずには居られない。身体全体を舐める様に見られ、居心地の悪さが襲って来る。
「酒井さん、本当にこんなガキ……じゃなかった、こんなお子様とバトルするんですかぁ？」
言い換えてもなお敵意を感じさせる遠藤の言葉は、悠人をすっかり黙らせてしまった。
「遠藤っ、その言葉には哲学が感じられん。我々は公道の哲学者(フィロソファー)だ。非礼を詫びたまえっ」
「おっと、いけね。コース作りの段取りして来ますね、じゃっ！」
言い終えるより早く、骸骨の絵がプリントされたTシャツをひらひらさせて、仲間の群れへ帰って行ってしまった。
「重ね重ね申し訳無い。あいつはこのチームに誇りを持っていてね、『ブイ・フィロソファースが舐められた』とでも思っているのだろう」
呆れ顔を見せる酒井だが、彼にしてみれば「気持ちは解る」と言ったところだろう。現に彼も、最初は「私に失礼だ」と答えている。
「よし、ぼちぼち準備が出来た様だ。行こう」
準備とは、走りに来た他の走り屋達を勝負に支障の無い場所で待機する様誘導したり、決戦の舞台となる峠道に一般車両や、落石などの危険が無い事の確認、タイムを計る人員の配置など、違法な行為とは言え彼等なりの段取りやルールが有るらしい。
「……でも、なんか今夜は人が多いですけれど、大丈夫でしょうか？」
先程から気になっている人の多さ。主にこの峠の走り屋達の様だが、この一週間で最も多い。この状況で、無関係な者を巻き込む事故が起きたりしないか、心配でならない。
「ああ、ウチの連中が安全な場所へ誘導している」
「そうですか……有難う御座います。でも、どうして普段の週末より人が多いのでしょうね？」

決して全国的にメジャーなワインディングスポットであるとは言えない三敷峠は、二十台も居れば多いと感じるが、今夜は五十台強は居る。
「あぁ、遠藤がそこらじゅうに触れ回ったらしい。……つまり、私達のバトルを観に来たギャラリーだ」
「なっ……どうしてっ……？」
ただでさえ公道レースが初めての悠人には、非常に大きなプレッシャーだ。その事を表情から窺(うかが)い知った酒井は、こう続けた。
「気にする事は無い。それは、雌豹が居ない今、私がこの峠(やま)で最速だからだ」
そう言い放った酒井は、愛車へと乗り込んで行った。

第七話　赤い灯火

白いＳＡ２２Ｃ型ＲＸ‐７と黒いＤＣ２型インテグラタイプＲが、ブイ・フィロソファースのメンバーに誘導され、車体の先端を揃えて並べられる。遠藤のコイントスにより、悠人のＲＸ‐７は一つ目のコーナーに対しイン側となる右車線、酒井のインテグラはアウト側となる左車線に配置された。

車両の配置が完了したところで、酒井が運転席の窓を開け、手振りで悠人にもそれを要求した。悠人はシートベルトを外し助手席側に大きく身を乗り出すと、レギュレーターハンドルをせっせと回す。

「な、なんでしょうか？」

この車にはパワーウィンドウが無いんですから……。

内心ぼやいてしまう。こういう時ばかりは、旧型車種である事を思い知らされる。

「今夜は、彼女は一緒でないのか？」

酒井は不思議そうな面持ちで尋ねた。

「カノジョ？あ、あぁ、ナナの事ですか？彼女なら……多分、来ないと思います」

これを言葉にして言わされてみると、より一層落ち込んでしまう。

「そうか、残念だな。雌豹……いや、怜奈君と私のバトルは、常に彼女に見守られて来た。今夜の、この運命的な一戦も是非見届けて欲しかったものだ」

そう言いきると、再びウィンドウを閉めてしまった。

あ、自分の言いたい事だけ言って閉めちゃった……。

別に、何か言い返したい事が有った訳ではないのだが、彼の一方的な行いに振り回されている気がしてならない。もっとも、こちらも突然の勝負を申し入れた身、感謝こそしても、恨み言を言える立場でもない。

やむを得ず、こちらもウィンドウを閉め、改めてシートに背を沈

める。悠人の溜息ともとれる深呼吸と、シートベルトとバックルの繋がる音とが重なり、それが引き金であったかの様に車内の空気が一変張りつめたものになった。
遠藤が両者の前方に立ち、悠人を睨み付けて言う。こちらは窓越しにも聞こえる大きな声だ。
「おいっ、雌豹の弟。この峠(やま)は、たまに猫やら鼬(いたち)やら、獣が飛び出して来やがる。てめえのアネキみたいに、それ庇って死ぬ様な真似するなよ。それ観るこっちの方が後味悪いからな」
彼なりの優しさか？要は「死ぬんじゃないぞ」と、言ってくれているのだが、何か引っ掛かる。
「あ、はいっ……ん？」
悠人は、その意外な言葉が腑に落ちない様子であったが、思索を遮ったのは秒読みの声であった。
「用意は良いか！？」
遠藤の声に、両者がパッシングで答え、アクセルを小刻みに煽ってタイミングを測っている。それを確認した遠藤が両手を突き出し、両手の五本指を振って注目を促した。
そうだ、今は考えるな……。
ロータリーエンジンのそれと、自分の鼓動が重なるくらいの緊張感。心臓が高速回転している様に思えるが、どうにか意識をＲＸ－７から伝わる感触に集中させる悠人。
「ファーイブッ！」
ナナ、今日まで有り難う……。
「フォーッ！」
意気地が無くて怒らせてしまったけれど、
「スリーッ！」
大丈夫、
「トゥーッ！」
精一杯、
「ワァンッ！」

走るから……。
「ゴォォォーッ！」
遠藤が五本の指を折り終えて両手を振り下ろすと同時に、ギャッ。そう、短いスキール音を夜空に響かせて、二台が一斉に飛び出した。微かに残されるゴムの焦げた匂いが、涼しい風に流されて消えてゆく。その向こうで横一線に遠ざかる赤い灯火（ともしび）が、甲高いエンジンの音とは対比的に、儚さを醸していた。
「懐かしいよな、この風景……」
「あぁ、昔は年中、あのテールが並んでかっ飛んでってたよな。今夜のリーダー、久しぶりに楽しそうでさ……」
ブイ・フィロソファーズの幾人かは、そんな事を頭に浮かべていたが、ここ最近走り出した様な若い走り屋達は、無邪気な歓声を上げる。
「やっぱ、三敷の黒インテはスゲーッ！」
前輪駆動車は、構造上宿命的に静止状態からのスタートで不利とされる。加速時には、車体前方が浮き上がろうとして、駆動力が前輪から効率的に路面へと伝達されないからである。
しかし、酒井のインテグラは、車両の調整と運転技術が絶妙で、不利を感じさせない好スタートをきった。
「雌豹の弟、なかなかやりやがるな」
観戦する者の中で、遠藤だけは悠人のスタートの方を高く評価した。
酒井さんの全力スタートに、並んで行きやがった……。本当に走り始めて一週間のガキか？
二台は、数百メートルの平坦なストレートを、最大の加速度で駆け抜け、その先に在る登りながらの緩やかな右コーナーへと、並走したまま飛び込んでゆく。
「ふむ。これは、なかなか……」
酒井の口から感嘆の声が漏れる。遠藤同様、自分のスタートに付いて来られた悠人に、素直に関心した。

「さぁ、この次はどう来る？」
ギリギリまでブレーキを踏まずに堪える悠人。この緩やかな右コーナーの次は、複合気味のきつい左コーナー、そして、その後に待つのは少し長めのストレートである。
「ここが一つ目のポイント。後のストレートで差が出るっ……でも、どうするっ？」
折角の好スタートで並んだのだから、ここで酒井を前には出したくはない。しかし、ナナとのシミュレーションでは、後追い状態での想定が基本だった。今、この瞬間に結論を出さねばならない。
後のストレートでの立ち上がりを優先するなら、早めのブレーキ。前輪駆動車に対し加速に分が有る後輪駆動車のＲＸ‐７、セオリー通り、今は抜かせてストレートでの加速で抜き返すか。
「駄目だ、あの人をただのＦＦ乗りだなんて思ってはいけないんだ……」
緩やかな右コーナーとは言え、微妙なアクセルワークのみで車体の姿勢を維持し、インテグラとの並走を続けている。初めて体験する峠での駆け引きは、あまりにもハイレベルで、気の遠くなる様な集中力を要求して来る。
「まだ退(ひ)かない？無茶だ！意地張ってあっという間に自爆する気か！？これだから初心者はっ！！」
ＲＸ‐７は、手練れの駆るインテグラと同等の速度を維持したまま、右から左旋回へと変化する地点へと踏み入った。

第八話　お互い様

並走したままのＲＸ‐７とインテグラは、双方全く進路を譲らなかった。緩やかな右コーナーからＳ字に繋がる左コーナーは奥へ行く程に曲率が高く、これ以上の並走を許しはしない。

通常に考えれば、何百回、何千回と走り込んで来んでクリッピングポイントを熟知している酒井の方に、分が有って然りだが、悠人がインテグラの速度に合わせアクセル開度を維持している事で、酒井には迷いが生じる。

「退く気ゼロか。このまま行けば、ＳＡはガードレールを突き破って転落……止(や)む無しっ」

酒井の目には明らかにオーバースピードであった。悠人との競り合いを降りてほんの少しアクセルを緩める。車体一つ分ＲＸ‐７が先行した形になり、イン側にスペースが出来た。

「来たっ！」

追って悠人も若干の減速。待ち侘びた瞬間であった。集中力が増し、時にすれば数秒の事がとても長く感じられた、右コーナーの攻防。左コーナーへの侵入と同時に、悠人の思惑通りに酒井が動いた為、大きな進展を見せる。

直ぐ様ステアリングを切り、イン側のスペースに飛び込む。すると、リアタイヤがグリップを失い、ＲＸ‐７はその鼻先を山肌をコンクリートで固められた法面(のりめん)の方へと向けた。

声にも出せない焦りが、酒井の喉もとまで込み上げて来た。今、目の前に見えるＲＸ‐７は、明らかにスピン状態に陥っているのだ。

まずいっ、私がＳＡに突っ込むか、それより先にＳＡがガードレールにぶっ飛んで行くかだっ。

そう直感した酒井の目の前には、惨状が広がる筈だった。運転技術の高い者程、危険を察知する能力にも優れ、対処、つまりこの場合は減速に対する初動が早かった。それでも酒井は、衝突は免れな

いと覚悟した。
　しかし、二台はあっけなくコーナーを抜けて行く。
「……有り得ないな……」
　酒井が全てを理解した時には、二台ともが次のストレートを立ち上がっていた。
「極端なアングルを付けてのドリフト……旧車には旧車なりの走り方か。コイツを相手にしていると心臓に悪いな」
　悠人が十分な減速をせずにコーナーに進入した為、酒井の目にはRX-7がスピンした様に見えたが、その実、コーナー進入直前から車体の向きを変え始めており、悠人が意図したのは極度に角度の深いドリフト走行を行う事であった。
　現代の車種に比べて、昭和五十年代前半までに生産された車種においては、制動力も安定性も劣っていた。それを補うテクニックとして、ドリフト時の路面との抵抗をも減速する力に利用する走行が実用されていたのである。
「ごめん、おじさん！無茶は今回だけだからっ」
　自分にそう言い聞かせながら、次のコーナーを目指す悠人。とは言え、結局は曲芸的な走行となり、無駄も多かった。酒井を押さえ込みはしたものの、ピッタリと後ろに付いて来られている。
　出口が見えてから踏みっぱなしにすれば、ターボラグを抑えられる分、離せると思ったのに……やっぱり、付け焼刃って言うやつかな……ナナ。
　悠人としては反省の多いコーナリングであったが、酒井の悠人に対する評価は大きく変わっていた。
「まったく、たった一週間と言う期間で、どうしてあれだけの事が出来る？素人としてはあまりにも無茶だが、私が退く事を確信しての攻めであったならば、私もそれなりの決心を持って臨まねばならない」
　峠の巧者を驚嘆させるだけの悠人の所業は、酒井の心にある種のスイッチを入れさせたと言える。本心、あの頃を懐かしむお遊びの

つもりで受けたゲームであった。上手くすれば、怜奈に近づくきっかけになるとも。それが、本気で勝負しなければならない相手だと悟ったのは、その後幾つかのコーナーを抜けた頃であった。
「やはり、まぐれではないな。徐々にペースを上げてきている」
相変わらずのテールトゥノーズ。決して、速度的には抜かせない事は無い。しかし、登って道幅の狭い区間に入って以来、こちらが抜きに掛かろうとするとドリフト走行をするＲＸ‐７は、ことごとくオーバーテイクの機会を奪う。
「確かに、ドリフトでは速く走れない。タイヤやブレーキが進化した現代においては、それが通説だ。しかし、彼は、極力速度を殺さず、こちらの車幅分を空けないギリギリのアングル。一発目の派手で危ういスライドとは違い、今度は明らかに抜かせない為のコンパクトなドリフト……あぁっ！なんていやらしい性格なんだっ！！」
頭を押さえ込まれている様なストレスに苛立ちを抑えきれず、思わず叫ぶ。直ぐに大声を出す人間は見苦しいと思うが、叫んで冷静になれるなら、プライドやポリシーなどは取るに足らない物だ。
「その後はナナの戦略通りで上手く行っているけれど……なんか、自分が凄く嫌なヤツになって行く気がするのは何故だろう……？」
その頃、麓では携帯電話機のテレビ電話機能を使って、遠藤が勝負の行方を追っていた。
「遠藤さん、次の中継。中腹に居るメンバーからテレ電が着信しましたよ」
「そうか、貸せ」
他のメンバーから携帯電話を受け取って、画面をまじまじと見つめる。
「でも、良いんですか？暗くてあんまり分からないと思いますけれど……」
それでも良い。先程の悠人のスタートの良さを鑑（かんが）みると、少しでも経過を知っておきたい。雌豹の弟がどれ程のものか。当然、酒井

黒インテの圧倒的勝利は火を見るより明らか。いや、そうでなくてはいけない。遠藤はそう信じて疑わない。
《遠藤さん、来ました！！》
携帯電話の向こうからの声と共に、二つのエンジン音が刻むリズムが聞こえてくる。
「来たな……な、にっ？」
遠藤は、目を見開いたまま固まってしまった。
「……遠藤さん？」
「ん？あ、はっ、あ、おい、ちょっ、これ、どう言う事だ？何か酒井さんの車にトラブルでも起きたのか！？」
暗く狭い液晶画面の中で、四つの光の塊が大きくなって来たかと思うと、一瞬にして横切って消える。そして、赤い灯火だけが残像になったかと思うと、それも直ぐに消えてしまった。
どんなに暗くとも画質が悪くとも、あのリトラクタブルヘッドライト独特の光軸が先行しているのが判った。
ＳＡが前じゃねえかっ……。
遠藤は、携帯電話を貸してくれたメンバーに掴み掛かり、どういうことかと凄んだ。
「え？いや、分かりませんよ、俺達だってっ」
戦略的にわざと後ろについたのか？いや、だとしても、素人相手にそんな戦略なんてものを持ち込まされる事自体が異常なのだ。
まさか、前半にこんな……。くそっ、下の方から全部のコーナーに立たせておくべきだったっ。
相変わらずの調子で、ＲＸ‐７が前、直ぐ後ろをインテグラが追う。この先、中腹からは勾配のきつい所が集中しており、そんな中でＲ（曲率半径）の小さいヘアピンカーブでは、極度の減速を強いられ再加速で駆動輪のタイヤが悲鳴を上げる。こと、前輪駆動車は操舵と駆動の双方を同一輪が担う為、磨耗が速い。先ゆきの事を考えると、ここでタイヤを酷使する訳にはいかない。
ここまで押さえ込まれ続けるとは考えもしなかったが、実際、雌

豹の弟……悠人は速い。私の見立てでは、あのＳＡも二六〇馬力弱。スタビリティ的にこちらが優位でも、駆動方式の差は有る。しかし、君がそれだけリアを流してくれるのなら……。
「あのヘアピンこそがその時だっ」
酒井は、戦略が頭の中で成立すると、実行するタイミングを逃さぬ様、ＲＸ‐７の動きに細心の注意を払う。
「君は知っているか？そのドリフト走行を、初めて行なったと言われる人物を」
ＲＸ‐７のナンバー灯を真正面に見ながら、追走を続ける。
「タツィオ・ジョルジオ・ヌヴォラーリ、約七十年前に全盛を誇ったイタリアのレーサーだ」
接近し過ぎず、いつでも行動に抜きに掛かる事の出来る距離を保つ。
「嘘か誠か、彼にはミッレ・ミリアの伝説と言うものが有る」
残り数百メートル。次のコーナーを抜ければ、その後は急勾配のヘアピンは直ぐそこだ。
「正直、こんなに楽しませてくれるとは思いもしなかった」
酒井はステアリングコラムのレバーに手を遣り、笑みを浮かべる。
さぁ、行かせて貰うっ！
「ん？コーナーを抜けたらインテグラが居なく……まさか、酒井さんに限ってコースアウトなんて……？」
悠人は、ルームミラーに移っていた後続車のヘッドライトを突然見失い、慌ててドアに移設された両サイドのミラーも確認するが、やはり見当たらない。おかしい。音は聴こえる気がするのに。
「あの酒井さんに限って、有る訳無いとは思うけれど……次のヘアピンを抜けても追って来なかったら、様子を見に戻ろう……」
マシントラブルなどで減速したのなら兎も角、もしもの事があればまずい。悠人の思考は後方に向いてしまい、集中力を欠いた状態でヘアピンカーブに入る。
……！？

悠人は、右ウィンドウの外に、有り得ない筈の気配を感じた。
「いつの間にアウト側にっ！？」
インテグラは、RX-7が走行するすぐ横を抜け、ホイルスピンを起こさないギリギリ、極限のアクセル開度でヘアピンコーナー出口を立ち上がる。
「抜かれ……た……？」
アウトインアウトで抜ける筈だった出口のアウト側を塞がれた事で、アクセルオンが遅れ、後輪駆動でありながらコーナーの脱出速度で負けてしまった。
「やはり成功したか。あまり、こういった小手先のテクニックは好きではないが、今回はお互い様だ」
ヌヴォラーリのミッレ・ミリアの伝説、それは『ヘッドライトを消してのオーバーテイク』である。夜間走行において、ヘッドライトを消灯する事で自車の存在を隠し、行く手を阻まれずに先行車を抜き去った。マスコミの誇張とも言われるが、彼の偉大さを表す上で欠かす事の出来ないエピソードとして、今でも語り継がれているのである。
「悪く思わないでくれたまえ。これでも君の走りに敬意を表したつもりだ。そして、君が抜かれる危険を感じた時にしか流さないと確信したからこそ出来た。そして、ここからは今までの様にはいかないっ」
前後の状況から事の真相を把握した悠人は唖然とし、また、恐怖すら覚えた。
「駄目だっ、離されるっ」
多分、読まれた。タイヤを温存したい考えで、コンパクトに、そして必要な時だけ、そう言う意図が。それを無灯火走行で突いて来た。民家はおろか、街灯すら無いこの暗闇の峠道を。自分が相手にしているのは、そういうとんでもない事を平然とやってのける相手なのだ。
「もう駄目なのかな……もしかしたらちょっとはましな勝負になる

かも知れないと思えて来てたのにっ」
ゴールまでの行程も中盤に差し掛かり、この時点での逆転劇は悠人の心にはあまりにもダメージの大きい出来事となってしまった。
「悔……しいっ……ち……たい……勝ち……たい……勝ちたいっ！！」
ゴンッ、ゴンッ！
精一杯アクセルを踏んでいるのに、益々遠くなって行くインテグラのテールランプ。悔しさのあまり、ステアリングに八つ当たりをする。手が痛いが、今はそれ以上に悔しさで胸がどうにかなってしまいそうだ。
「ちょっとぉ、もう、痛いなぁ」
会えなかったこの数時間が、とても永く感じた。
「ナナ！？」
途端、悠人の声が弾む。
「本当の勝負、始めるわよっ」
「え？」
ナナは、突然車内に現れると、助手席に座ってこちらを真剣に見つめている。走行中できちんと向き合えはしないが、その視線は分かる。
「だって、勝ちたいんでしょう？」
ナナの言葉は、問いの様でそうでなく、強い想いが込められているのが分かる。まだ勝てると。

第八話　お互い様（後書き）

本作をご覧頂けましたこと、心より御礼申し上げます。

本作は、作者はオンライン小説について初心者であり、お見苦しく感じられる記述も多々あると存じます。

よって、本作に対し寄せられるコメントは、誹謗中傷や個人的な理想の押し付け（『提案』は有り難く存じます）を除き、実現性の可否は兎も角、アドバイスとして真摯に受け止めるべきと心得ております。

以上のことから、本作の世界観がより熟成される為にも、ご覧下さいました皆様からのお声を賜りたく、宜しくお願い申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0830g/

愛しのセブン -My dearly beloved seven-

2010年10月11日01時03分発行